

## 『大坂名家肉筆画帖』の特質とその受容

柴田就平( 関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程 )

近世の寄合・蒐集画帖には、現在では知られていない画家の作品が数多く収載されていることが多い。しかし、これらの画家の中には、画人録や名流記などの諸文献に掲載されている画家も多く、在世時に一定の評価を得ていたことが確認できる。したがって、寄合・蒐集画帖は、当時の画壇状況を投影していると同時に、作品数の少ない画家の作風が分かるなど、絵画史研究において重要な意味を持つといえよう。なかでも名所画帖などの画題を限定した寄合・蒐集画帖は、注文主による意向が強く反映された画帖だといってよい。

本発表で取り扱う関西大学図書館所蔵『大坂名家肉筆画帖』は、複数の名家の作品により構成された絹本墨画淡彩の寄合・蒐集画帖である。表面38頁、裏面37頁に計75点もの作品が収載されているが、序文や跋文はなく、画帖の成立事情などは不明である。題箋も貼付されておらず、画帖の名称も知ることができない。しかしながら、69名におよぶ画家が携わった本画帖を通観してみると、注文主による強い意向を確認することができ、それに基づいて画家が制作したと推測することができる。では、本画帖は、どのような目的で制作され、注文主らによってどのように受け入れられたのであろうか。

そこで本発表では、まず各図の作者を検討し、画家の交流関係や師弟関係を整理したうえで、本画帖の成立時期の特定を試みる。次に、各図の画題や作品配列に注目し、その特質を明らかにしたうえで、注文主・所有者の人物像、制作目的について考察する。加えて、本画帖に収載された作品の中には、他の画帖に収載された図様とまったく同一のものが含まれていることから、これらの図様について他の画帖作品の図様と比較検討し、画家の名所絵制作における制作姿勢を明らかにしたい。以上の考察から、本発表では、幕末明治期に制作された名所画帖の一典型として、『大坂名家肉筆画帖』を採り上げ、その特質と受容の諸相を明らかにする。